

『新千載和歌集』神祇歌の配列考（一）

— 附 『新千載和歌集』神祇歌九三八〜九六〇番歌註釈 —

松本郁代
鹿野しのぶ

1 『新千載和歌集』について

南北朝時代の北朝第四代、後光厳天皇は観応の擾乱・正平の一統・北朝三上皇が南朝により賀野生に連れ去られるなど世情が不安定な中、幕府の強行により観応三年、十五歳で践祚。しかし南朝軍の侵攻を避けるために、近江・美濃へ避難することもあった。

歌壇では貞和五年（一三四九）『風雅集』完成後、花園法皇・光厳上皇・崇光上皇という京極派活動基盤をなくしてしまふ。そうした中であつて、冷泉為秀は精力的に古典の書写などを行い周到な準備をした上で、後光厳天皇に勅撰集の編纂を打診する。不穏な世情の中、為秀の行為は時宜に疎いものと稿者は考えていた⁽¹⁾。しかし、近年、後光厳天皇の書状の発見により天皇も勅撰集の編纂を積極的に考えていたことが明らかとなり⁽²⁾、「為秀の運動も全く成算がなかったものではな⁽³⁾」いとされる⁽³⁾。

一方、二条良基は延文元年（一三五六）ごろには、のちに准勅撰集とされる連歌集『菟玖波集』の編纂を始めて

いる。この連歌との関係は後述するように『新千載和歌集』（以下、『新千載集』と略す）の撰集内容にも影響を与えていると考えられる。

その延文元年六月十一日、後光厳天皇は二条入道大納言為定に勅撰集撰集の綸旨を下した。これは將軍足利尊氏の執奏によるものである。この後の『新拾遺集』『新後拾遺集』『新統古今集』は全て武家執奏となった。

同年八月二十五日には百首歌の詠進が下命される。いわゆる『延文百首』である。最終的に三十三名に詠進下命があり、この中には冷泉為秀も人数に加わることが詠進せず、為秀は結果、『新千載集』には一首も入集していない。これは弟子の意見に従ったものであるということも近年明らかにされた⁽⁴⁾。延文四年（正平十四年・一三五九）四月二十八日四季六巻を奏覧、十二月二十五日に返納され、『新千載集』二十巻が完成した。

さて、『新千載集』の撰集意図については、深津睦夫氏⁽⁵⁾の論に詳しい。それは後醍醐天皇を讃頌しまたその御霊を鎮魂するものであるという。これは足利尊氏の後醍醐天皇に対する強い意志が背景にあった。それが故に法体であったにもかかわらず南朝にも通じていた二条為定を撰者とし、下命者の後光厳天皇が撰者とする意向があったであろう冷泉為秀は、どんなに歌道家としての力を持っていても、撰者から完全に漏れるのである。深津氏は本歌集が崇徳院の鎮魂を目的とした『千載集』の例に倣ったものであることも、書名が『新千載集』であることともに指摘する。さらに氏はこの後醍醐天皇の鎮魂という意図を慶賀部において読み取っておられる。このことは本稿で松本郁代氏が考察するように『新千載集』神祇歌でも大いに表現されている。

ここでは『千載集』に始まる神祇部、特に十三代集における配列の特徴を先行研究に導かれながら確認しておきたい。配列構成を考えるに当たり、『千載集』から『新統古今集』までの神祇部の作者と歌材（神社・内容）の一覧表を作成し、今は巻頭歌の作者と歌材のみを示す。

【表1】勅撰集神祇部の巻頭歌一覧

勅撰集	作者	神社・歌材
千載集	上東門院	春日
新古今集	神詠	日吉
新勅撰集	源当時	日本紀竟宴和歌
続後撰集	藤原実氏	伊勢
続古今集	神詠	稻荷大明神
続拾遺集	後鳥羽院	伊勢
新後撰集	後宇多院	伊勢
玉葉集	神詠	伊勢
続千載集	後嵯峨院	住吉
続後拾遺集	藤原俊成	伊勢
風雅集	神詠	賀茂
新千載集	後宇多院	平野
新拾遺集	神詠	春日
新後拾遺集	藤原基家	伊勢
新続古今集	神詠	住吉

勅撰集における神祇部を俯瞰した巨視的にして詳細な研究として深津陸夫氏「勅撰和歌集神祇部に関する覚え書き」⁶⁾がある。特に神社歌群の配列について、神祇部の嚆矢である『千載集』では「神社の序列も明確な基準があったとは見えない」とし、『新古今集』では「明らかな神社別の歌群配列」であると指摘する。『新勅撰集』では神社別の歌群構成よりも季節や共通素材によるグループ構成が優先されているという。

『続後撰集』では「整然とした神社の歌群配列」になっており、伊勢・石清水・賀茂・春日・住吉・大神・熊野・日吉・北野という順序は熊野を例外として「見事なまでに二十二社の序列と一致している」と深津氏は指摘する。そして、これ以降の勅撰集は『続後撰集』をその配列構成の規範としているとする。ここでもう少し子細に見てみよう。『続後撰集』の巻頭歌を挙げる。

百首歌たてまつりし時、寄社祝 前太政大臣

五三二 あきつはのすがたのくににあとたれし神のまもりやわがきみのため

『宝治百首』で藤原実氏によって詠まれた、神の国、日本国の国土の形成を詠んだ歌である。これを今、伊勢神

宮の歌として捉えようとする理由は、「神書」製作という時代背景を考慮したことによる。伊藤聡氏⁷⁾に拠ればこの「神書」製作は文治二年(一一八六)の重源と東大寺衆徒の伊勢神宮参詣と大般若法楽を画期とする緇徒による参宮ブームを背景としているという。氏はその内容の特徴の一つとして、伊勢神宮の起源＝世界(日本)の起源として構成していることを挙げている。こうした時代背景により、『続後撰集』の巻頭歌も伊勢神宮を対象として考えると考える⁸⁾。同様に『新後撰集』の後宇多院の巻頭歌も直接伊勢を詠んではないが歌を挙げて見てみよう。

百首歌めされしついでに、神祇 太上天皇

七一四 千はやぶる七代五代の神世より我があしはらに跡をたれにき

『嘉元百首』で詠まれたこの歌も神世七代から始まる葦原国を詠じたものである。巻頭二首目は五十鈴川を詠んでおり、配列上も伊勢神宮を対象としていると捉えることができる。

『続古今集』は稲荷大明神の神詠が巻頭に置かれている。これについて、神詠という点から小林一彦氏に言及がある⁹⁾。氏は『明月記』の記事に定家が『新古今集』撰集の際に神慮を刺激しないよう慎重な態度を取っていたこと、定家単独撰の『新勅撰集』において神詠を一首も採歌していないことを指摘し、その後の十三代集のうち、御子左家(二条家)が撰集した勅撰集では「神詠を取捨選別するようなことは慎むべきだ」とする定家、あるいは俊成の教誡が伝えられた結果ではないかとする。『続古今集』については当初の計画通り為家の単独撰であれば「神詠は盛り込まれていたかどうか」としている。こうした神詠に対する考えと、もう一点は稲荷信仰が考えられるが、これについては稿を改めて考えたい。他の集について小林氏は『玉葉集』『風雅集』『新続古今集』は二条家の撰集で

【表2】『新千載集』神祇歌・配列構成

配列	歌番号	作者	神社・歌材	配列	歌番号	作者	神社・歌材
1	938	後宇多院	平野	37	974	藤原実泰	神楽
2	939	読人不知	平野	38	975	藤原公賢	神楽
3	940	後二条院	食薦	39	976	賀茂氏久	賀茂
4	941	順徳院	日陰の蔓	40	977	三条実重	春日
5	942	藤原定家	山藍の衣	41	978	藤原忠通	春日
6	943	伏見院	天の戸・神楽	42	979	中臣祐春	春日
7	944	定為	天地開闢	43	980	凡河内躬恒	春日
8	945	後醍醐院	天岩戸	44	981	二条為定	春日
9	946	慈道	天岩戸	45	982	後醍醐院	春日
10	947	藤原盛徳	天岩戸	46	983	足利尊氏	春日
11	948	中臣祐親	天岩戸	47	984	花園院兵衛督	春日
12	949	荒木田氏忠	伊勢・神路山	48	985	二条良基	春日
13	950	荒木田氏之	伊勢・神路山	49	986	中臣祐世	春日
14	951	従二位為子	伊勢・神路山	50	987	良信	述懐
15	952	小槻匡遠	伊勢・小車錦	51	988	菅原為長	北野・一夜松
16	953	藤原朝村	伊勢・鈴鹿山	52	989	津守国冬	住吉
17	954	読人不知	伊勢・五十鈴川	53	990	津守国夏	住吉
18	955	崇光院	伊勢・五十鈴川	54	991	京極為兼	住吉
19	956	源資茂	伊勢・五十鈴川	55	992	尊円	(住吉)
20	957	荒木田守藤	伊勢・五十鈴川	56	993	津守国平	住吉
21	958	度会常昌	伊勢・千木片削ぎ	57	994	二条為明	住吉
22	959	源顕実母	祝言	58	995	藤原長秀	住吉
23	960	良瑜	熊野・岩田川・禊	59	996	津守国夏	住吉
24	961	二条良実	詔	60	997	顕詮	(祇園)
25	962	吉田隆良	賀茂	61	998	祝部成繁	日吉
26	963	源顕氏	賀茂・神の誓ひ	62	999	慈勝	日吉
27	964	源兼氏	神の誓ひ	63	1000	慈道	日吉
28	965	鴨長明	鴨	64	1001	覚為	日吉
29	966	藤原家教	賀茂	65	1002	慈順	日吉
30	967	二条為定	賀茂	66	1003	慈伝	日吉
31	968	賀茂教久	賀茂	67	1004	源和氏	日吉
32	969	賀茂信久	榊	68	1005	祝部国長	(日吉)
33	970	賀茂氏久	賀茂・榊	69	1006	道玄	日吉
34	971	龜山院	賀茂	70	1007	尊什	日吉
35	972	読人不知	賀茂	71	1008	源清氏	石清水
36	973	藤原雅顕	賀茂	72	1009	足利尊氏	石清水

はないことを指摘し、『新拾遺集』については為明撰ではあるが、最終的には頼阿の所為ではないかとする。

『統千載集』の巻頭歌は住吉を詠んだ歌である。撰者は『新後撰集』と同じ二条為世である。先述の通り『新後撰集』では伊勢から始まる配列である。二度目の撰集であるからこそ、変化のある配列構成、それは和歌神である住吉で始まる構成にしたのではないかと考える。

『新千載集』の神祇歌は『千載集』以降の勅撰集において最大入集数をみる『玉葉集』の七十四首に継ぐ七十二首を入集させている。為定の神祇歌編纂に掛ける思いは非常に強かったことが数字の上でも理解され、神祇歌の分析は非常に重要であるといえよう。

そこで、『新千載集』の神祇歌を見てみると、先にも後にも例がない平野が巻頭に置かれている。これについて松本氏が指摘するよう、大嘗祭の始まりを意味する配列構成であるが、もう一つ、本歌集の成立時期との関係を考慮するに、連歌との関わりがあるものと考ええる。菅野扶美氏⁽¹⁰⁾は『北野曼茶羅』について論究される中で、北野天満宮と平野社の関係に言及する。それは「神拝次第」に「平野（伏拝也／無別社）」の表記があり、別宮は設けていないが、平野社を遙拝するとの指定があるという。北野で平野を拝む理由として、こうした古くからの関わりその他に平野社でも連歌をよく行ったことを指摘する。のちの例ではあるが、『心敬私語』に「平野こそ北野へ続く道なれや⁽¹¹⁾」とあり、連歌において平野社が重視されていることが理解される。撰集下命があった延文元年、二条良基は後に准勅撰集となる『菟玖波集』の編纂に着手する。為定はこうした時代背景を汲み取りつつ巻頭二首に平野社を選び、自身に課された後醍醐天皇への鎮魂を意図する配列として後醍醐天皇の父である後宇多天皇が平野で詠んだ和歌を巻頭に配したものと考える。これには撰集に助力したとされる頼阿らの意向もあったか。

『新千載集』の神祇歌は『千載集』以降の勅撰集において最大入集数をみる『玉葉集』の七十四首に継ぐ七十二首を入集させている。為定の神祇歌編纂に掛ける思いは非常に強かったことが数字の上でも理解され、神祇歌の分

析は非常に重要であるといえよう。

本稿では松本氏の論考ののちに今回取り上げる歌群（九三八～九六〇番歌）についての註釈を示す。なお、註釈においては、詠歌の際の和歌の解釈と、一書として編纂された際に形成される歌群における和歌の解釈を同時に考える必要があるが、註釈においては詠歌時点での解釈を中心に記し、勅撰集の歌群としての解釈は松本氏の論考を参照願いたい。

註

- (1) 鹿野しのぶ『冷泉為秀研究』新典社、二〇一四
- (2) 小川剛生「菟玖波集前後―後光厳天皇と二条良基」（俳文学会東京研究例会第四四六回例会 第30回テーマ研究「歴史史料と連歌・俳諧」二〇一八年十二月二十二日 於・聖心女子大学）
- (3) 小川剛生『中世和歌史の研究』塙書房、二〇一七
- (4) 小川剛生、前掲註3論文、参照。
- (5) 深津陸夫「新千載和歌集の編纂意図」（『中世勅撰和歌集史の構想』笠間書院、二〇〇五）
- (6) 深津陸夫「勅撰和歌集神祇部に関する覚え書き」（『皇學館大学神道研究所紀要』二〇、二〇〇四）
- (7) 伊藤聡「中世における神道説の類聚」（『日本文学』六四―七、二〇一五）
- (8) 『統後撰集』の神祇巻頭二首目は「ひかりをばたまぐしのはにやはらげて神のくにともさだめてしがな」（五三三・「神祇の心をよませ給うける」・土御門院）である。和光同塵を詠じたものであるが、ここでも「神の国」を詠んでいること、つづく三首目は伊勢神宮を詠んだものであることから首肯されよう。
- (9) 小林一彦「十三代集の神祇部と定家―「神歌甚だ多し、…仍りて手を交へず」の行方―」（『いずみミニ通信』一、

一九九六)

- (10) 菅野扶美「空間から見る北野天神信仰の特徴」(瀬田勝哉編『変貌する北野天満宮』平凡社、二〇一五)
(11) 「平野こそ北野へ続く森なれや」とする本文もある。

(以上、鹿野しのお執筆)

2 『新千載和歌集』 神祇歌の配列構成 (二) —— 鎮魂としての「大嘗祭」

天皇の勅により成立した勅撰和歌集のうち、『新千載和歌集』(以下『新千載集』と略す)の撰歌に將軍足利尊氏が関わったことは、権力者が歌集をどのような表現媒体として捉えていたかを示している。歌の撰集目的は、歌集の歌群や配列によつて表現される。よつて本節では、『新千載集』神祇歌の歌群と配列における神話表現について考察を試みる。

後光厳天皇勅撰『新千載集』は、足利尊氏の執奏により二条為定が延文四年(一三五九)撰進した歌集である。本歌集は尊氏が後醍醐天皇鎮魂のために奏上したものとされ、卷二十慶賀歌には尊氏詠の後醍醐天皇を言祝ぐ歌が入集している⁽¹⁾。深津陸夫氏は、慶賀歌にみる大嘗会の歌群の最後、且つ『新千載集』全二十卷の巻軸歌となる歌が、後光厳天皇ではなく後醍醐天皇を言祝ぐ歌であることから、後醍醐天皇の鎮魂を表わすと指摘する⁽²⁾。この事例から、「大嘗祭」が天皇の鎮魂と何らかの関係があることを示唆している。

さて、「表2」「新千載集・神祇歌・配列構成」(鹿野氏前節解説)に示されたように、『新千載集』神祇歌の構成

は、他の勅撰和歌集の神祇歌とは異なり「平野」から始まっている。勅撰和歌集に「神祇」の項が登場したのは、『後拾遺集』巻二十・雑部の小部立てであり、一巻の神祇歌として独立したのは文治四年（一一八八）に藤原俊成が後白河院に撰進した『千載集』以降である。また同集以降の勅撰集では、神祇歌の前後に釈教部が立ち、神祇歌と釈教部が対関係となるよう成立したことが指摘されている⁽³⁾。

『千載集』以降の勅撰集にみる神祇歌の構成は、朝廷祭祀の対象である二十二社に関わる詠歌や配列が多く、歌群でとらえれば神社詠や、天皇家や将軍家、和歌の家の属性に関わる神詠が登場し、歌群と歌群の間には神楽や述懐などの歌が挿入されていた。特定の神社の詠が多く入集すればする程、重要度が認められた⁽⁴⁾。そして、神祇歌の冒頭歌として一番詠まれたのは、【表一】「勅撰集神祇歌の巻頭歌一覽」（鹿野氏前節解説）にあるように「伊勢」であった。

『新千載集』神祇歌の冒頭に詠まれた「平野」は、大和国から平安京へ遷された際に創建された神社である。二十二社の一に列し、祭神は今木・久度・古開・比咩の四座である。桓武天皇母の高野新笠の信仰が篤かった今木神は、新笠祖先の百済系の祖先神（一説に百済の聖明王）とされ、久度神や古開神は竈神であり同じく百済系とされる。比咩神はのちに合祀された神で高野新笠の母方の祖神と推定されている⁽⁵⁾。鎌倉中期に平野社預の卜部兼文・兼方によって日本書紀の講義や研究が行われ、平野流卜部氏は「日本記ノ家」と評された。卜部氏には吉田社預の吉田流と平野社預の平野流があった。

卜部氏は、大嘗祭の辰日節会（大嘗会）に奏上された中臣の天神寿詞を伝えていた⁽⁶⁾。この寿詞は関係者に密かに相伝されたものである。平野流の兼文が後宇多天皇の大嘗会に際して「大祀寿詞秘説」の勘草者となり、祭主大中臣隆蔭が注進していた記録や、吉田流の兼夏が北朝の光明天皇の大嘗会の際、関白に対し寿詞に関する「十二

箇口伝」のうち二箇条を注申したなどの記録がある(卜部兼豊『宮主秘事口伝』)。卜部氏は大嘗会に奏す寿詞の秘説を伝えていた。ただし、寿詞の秘説は平野と吉田の両流に伝わっていたため、神祇歌の冒頭歌に平野が特別に登場する理由にはならない。

一方、歌集『新千載集』の撰集目的にそくせば、足利尊氏による後醍醐天皇の鎮魂という指摘も重要な視点となる^⑦。歌に詠まれた「平野」は北野社の境域に接しており、大嘗祭を斎行する上で重要な拠点となっていた。歌をつうじて平野の場所性を読み取ることも、歌の配列と意味を読み解く手がかりになると思われる。

よって、本節では神祇歌冒頭の「平野」詠歌の意味について、神祇歌の配列と全体構成から改めてその意味を解いていきたい。特に、神祇歌の歌の配列と用いられている歌語は、大嘗祭や神話に関わる内容を含んでいるため、そこに表わされている大嘗祭の神話表現についても考察を進め、後醍醐天皇との関わりについて論じる。

『新千載集』巻十二神祇歌は全七十二首からなるが、本節では歌群ごとに意味をとらえ考察を進める。そのため、本稿の鹿野氏による和歌註釈(後掲)ともに、複数回にわけて分析を発表していく。なお、本節で用いる歌番号は『新編国歌大観 第一巻 勅撰集編』に準じ、歌の末尾に()で示し、適宜漢字を宛てた。

一、神祇歌の配列と大嘗祭

『新千載集』神祇歌は、【表2】(鹿野氏前節解説)に示された神社・内容の順番で配列されている。まずは、冒頭二首の「平野」を詠んだ歌に着目しよう(波線・ゴチックは引用者による。原文の仮名に意味をとらえた漢字を適宜宛てた)。

亀山殿七百首歌に、平野を 後宇多院御製

① 今も猶民のかまどの煙までまもりぞすらむ我が国のため（九三八）

建春門院おなじ社にまゐらせ給うけるに御ともの上達部のなかに

よみ侍りける よみ人しらず

② ちはやぶる平野の松もけふこそは花さく春のためしなるらめ（九三九）

神祇歌は①の後宇多院詠の歌から始まる。後宇多院は後醍醐天皇の父にあたる。本歌は、仁徳天皇詠とされる「高き屋に登りて見ればけぶり立つたみのかまどはにぎはひにけり」（『新古今集』巻七・賀歌・七〇七）である。両歌は、民の生活を示す「たみのかまど」と、民の賑わいを示す「煙」が共通する歌である。さらに①の歌では、「まもりぞすらむ」「我が国」という表現により、詠者による民衆への意識や国家意識をみてとれる。次の②の歌には、神の依代であり神や天皇を示す常緑樹の「平野の松」と季節を表す「花さく春」が表現されている。これは、神や天皇のめでたい始まりを予兆させるものとして描写されている。

以上に示した歌の意味だけからでは、神祇歌が「平野」から始まる理由が見えにくい。しかし、続く歌の意味を知ることにより、別の観点からの解釈が可能となる。

人人に百首歌めされけるついでに、神祇を 後二条院御製

③ ちはやぶる神のすこもに霜さえしその暁は今も忘れず（九四〇）

題しらず 順徳院御製

④ とりかざす日かげのかづらくり返し千世とぞうたふ神のみまへに(九四一)

後京極撰政治家百首歌に 前中納言定家

⑤ 神代より契有りてや山藍に摺れる衣の色となるらむ(九四二)

右歌のうち③の「神のすごも(神食薦)」と、④の「日かげのかづら(日陰蔓)」は、それぞれ大嘗祭の神事で用いられるものである。大嘗祭は、天皇が即位した後に初めて斎行する新嘗祭のことで、旧十一月の中卯日から午日まで執り行われた。神食薦とは、大嘗祭で第一の大事とされる神膳供進の際に、神座の神膳に敷かれる薦のことである。また、日陰蔓とは、官人が着す冠の中子の根元に挿された常緑の植物のことである。この植物は、アマテラスが隠れた天石窟戸の前で、アマノウズメが立ち「蘿ひかげ」(日陰蔓)を「手強たすき」にして懸け「顕」れて、「憑談(ツキモノして口走る事)」したことで知られる(『日本書紀』巻第一、神代上第七段)。この③と④の歌は、それぞれ大嘗祭の後二条院(一一八五～一三〇八)、承久の乱で佐渡に流された順徳院(一一九七～一二四二)の詠歌である。大嘗祭の神事は卯日に神膳供進が斎行されるが、その準備のための行事も多く行われた。大嘗祭の斎場卜定は北野で行われていたが、卜定の前に斎場の関係者らが修したのが荒見河祓であった。荒見河が流れる川を紙屋川といい、北野と平野の境内を南に流れる。北野から平野へ参る際に渡る橋を「高橋」といったが、荒見河はこの高橋の北二町ほどの間の別称であった⁸⁾。その後、斎場の造設は北野に固定され、卜定の必要がなくなり荒見河祓は衰退した。このように、平野から北野にかけての一带は、大嘗祭斎場としての性質をもつ場所であった。

斎場としての北野には、神服をはじめ「由加物」と称される神饌供進に用いる雑器や雑贄、御料や調度の一切が

納入された。内院には八神殿や稲実殿、黒白酒屋などを設け、外院のほか神服院・小忌院・出納所・細工所・宿舍雑舎などが設置された。大嘗祭当日の巳刻に、北野の齋場から「悠基」と「主基」の御料や調度が大嘗宮に運ばれた後は破却された⁹⁾。③の歌にあるように、神食薦に霜がキラキラと冴えていた様を詠めるのは、神事を齋行した後二条院であるからこそであろう。

よって、①から④の歌を大嘗祭と結びつけて解釈すれば、平野と北野を地理的に結ぶ荒見河に掛かる「高橋」を渡り、神食薦や日陰蔓が安置されていたであろう北野の齋場へと場所が移ってゆく光景を読み解くことができる。

神祇歌冒頭の「平野」の歌は、天皇の代替わりと大嘗祭の始まりを、場としての齋場により表現しているといえよう。さらに⑤の歌には「山藍に摺れる衣」が登場する。これも大嘗祭に供奉する官人が着用する小忌衣のことを指すため、北野齋場に関わる歌として解釈できる。同時に波線部「神代」の描写から、現在から神代へと誘われる時空の推移もみとれる。よって、この⑤の歌は、大嘗祭齋行の準備が整い、大嘗祭が始まろうとする状態を示していると解されよう。

④に続く神祇歌の歌は次項で説明するが、天地開闢や天窟石戸開き以来の神話的時間との連続性が表わされている。平野から北野、そして宮中の大嘗宮へと場所が移動し、今まさに神代を再現した大嘗祭の神事が始まろうとする、その場面へと続いていく。

二、神祇歌における後醍醐天皇の姿

次に示す三首の歌は、前項で説明した歌に続くものであり、天地開闢や天窟石戸開きを詠んだ神代の歌である。

冬神祇といへる事をよませ給うける 伏見院御製

⑥ 天の戸のあけし昔をうつしきて神世にかへす朝倉の声 (九四三)

文保百首歌たてまつりける時 法印定為

⑦ 天地のひらけし時の蘆牙あしひびや神の七代のはじめなりけん (九四四)

百首歌めされける時 後醍醐院御製

⑧ 天の戸のあけし月日もかはらぬは神世ながらの光なりけり (九四五)

持明院統の伏見院詠に始まる⑥、後宇多院が文保二年(一一三一八)十二月に勅撰した『文保百首』に収められた⑦、後醍醐院による⑧の歌には、それぞれ「昔」(⑥)、「時」(⑦)、「月日」(⑧)と、時間的な隔たりのある神代と現在とを連続させる時間表現がみとれる。前項①から⑤の歌が大嘗祭斎行までの前段階を表わした歌の配列であるとする、⑥以降の歌は、神代を地上に再現した大嘗祭の神事そのものを表わした歌の配列といえる。以下、各歌の波線に着目しながら歌の意味を解いていく。

まず⑥に詠まれた「朝倉の声」とは神樂歌「朝倉」のことである。「天の戸のあけし昔」をそのまま地上に再現した様が詠まれている⁽¹⁰⁾。『日本書紀』神代上・第七段(原漢文)には⁽¹¹⁾、新嘗祭の記述がある。それは神事の最中にアマテラス弟のスサノヲが「天照大神の新嘗しめす時を見て、則ち陰ひそかに新宮にひみのみやに放尿くそまる」や、斎服殿でアマテラスが神衣を織っている時に「天斑駒あまはまこまを剥むぎて、殿おほのの薨おほを穿うちて投げ納なる」という狼藉おほを働いた描写とともに登場する。これによりアマテラスは天窟石戸に籠かこもるのである。すなわち、「是の時に、天照大神、驚動おどきたまひて、梭かひを以て身を傷ましむ。此に由りて、発愠いかりまして、乃ち天石窟に入りまして、磐戸いわどを閉とじて幽こもり居ましぬ。

故、六合の内常闇にして、昼夜の相代も知らず」と、世界が闇になる事態を引き起こしたのである。⑥に詠まれた「朝倉の声」とは、天石窟戸を開く「声」そのものに意味が捉え返されている。この歌では、高天原でアマテラスが新嘗祭を斎行していたこと、アマテラスが怒り天石窟戸に籠もり世界が闇に閉ざされ、天石窟戸の前でアメノコヤネが太祝詞を奏上したり、フトダマが幣帛を捧げたりし、最後はアマノウズメによる「俳優」によってアマテラスが天石窟戸から再登場した、その神話的時間の推移を読みとることができる。

続く⑦の歌には、天地の始まりを示し、物種である「蘆牙」から生成した「神世七代」が詠まれている。『日本書紀』神代上・第一段本文の記述には、

古に天地未だ割れず、陰陽分かれざりしとき、渾沌れたること鶏子の如くして、溟滓にして牙を含めり。(中略)時に、天地の中に一物生れり。状葦牙の如し。便ち神と化為る。国常立尊と号す(割注略)。次に国狭槌尊(割注略)。次に豊斟淳尊(割注略)。凡て三の神ます。

と、「葦芽」を物種として三柱の神が生まれた、という記述がある¹²⁾。つまり⑦の歌では、天地が始まる前のほの暗いぼんやりとした時間、いわば神話の原点となる時間にまで時がさかのぼっていることがわかる。

すなわち、⑥では天石窟戸神話における「内常闇」の時間、⑦の天地開闢前の混沌としてほの暗い、しかし未来への兆しを捉えた時間、と二つの歌を並べることにより、次への展開を期待させる配列上の意図が読みとれる。ともに原点から新たな「時」を開く、それにふさわしい歌が配されている。

続く⑧の歌では、神話から現世へと時間が推移していく。⑥と⑦の歌にみられた光のない時間から、⑧の歌では

「天の戸あけし月日」と、天石窟戸が開き光の差す時間へと推移した様がわかる。「かはらぬは神世ながらの光」と、天石窟戸が開いた神代から現世に変わらぬ時間が続くのは、天石窟戸から出たアマテラスの和光同塵によってであり、神仏に支えられた「光」の永遠性、自らの皇統を称えている。この場合の「光」とは、天石窟戸が開いて以来の「光」、アマテラスの「光」であり、アマテラスと同体視された光や太陽を尊格化した大日如来や毘盧舎那如来のことである⁽¹³⁾。

神代と現世を結ぶこの歌は、南朝で唯一入集した後醍醐天皇の歌である。鎮魂の主に想定された後醍醐天皇詠の「かはらぬは神世ながらの光」とは、神世そのままの「光」、その「光」を皇祖神より受け継ぎ皇統に連なる自身を称えた歌として解される。しかし、この『新千載集』が撰集された当時は、南北朝の対立により天皇家が激しく争っており、この歌が示す内容と皇統の実態とは乖離していた。撰歌されたのは、この対立の原因に関わり、現在もその影響を与えている後醍醐天皇の姿を鎮魂するためであったと思われる。

次に示す⑨から⑪は、前の歌と同様に天石窟戸が開きアマテラスが登場した場面が描かれている。

神祇歌の中に 二品法親王慈道

⑨ 天の原あけし岩戸の神路山日月くもらぬ世にこそ有りけれ (九四六)

建武二年内裏千首歌に、冬雑物といふ題をたまはりてよみてたてまつりける 藤原盛徳

⑩ 天の原岩戸をあけし神代より今もたえせぬ糸竹の声 (九四七)

題しらず 中臣祐親

⑪ くもらじなますみの鏡影そへて岩戸を出でし月の光は (九四八)

以下、歌の意味を捉えてみる。⑨の歌に登場する「神路山」とは、西行法師の歌に「神路山月さやかなるちかひありて天の下をばてらすなりけり」（『新古今和歌集』神祇歌・一八七八）があるように、伊勢国の歌枕である。大嘗祭は伊勢で斎行されていない。しかし、神事の場合は京都であっても、天皇は伊勢の方向に向かい神饌供進を行っていた。ここで伊勢国が登場するのは、以下、悠基殿と主基殿における神饌供進を表わした歌群として捉えられる。すなわち、高天原の天石窟戸を開き伊勢国のアマテラスが照らす「日つきくもらぬ世（日月曇らぬ世）」である天皇の治世を詠んでいる。⑩の歌も宮中の和楽器を指す「糸竹」が^{〔1〕}、「神代」から今に変わらぬ宮中の様子、朝廷の永続性を表わしている。これらは、アマテラスと天皇、朝廷との関わりを再確認する歌として解される。

次の⑪の歌に「月の光」が登場している点から、神事の時間帯が夜に推移していることが推測できる。神饌供進の神事は、卯日の戌刻に天皇が廻立殿に渡御し、亥刻に悠基殿で神饌供進を行い、子刻に廻立殿に還御する。翌辰日の丑刻に主基殿に渡御し、寅刻に神饌供進を行い、その後、廻立殿に還御したように、夜から明け方にかけて行された。そのため、儀礼の時間帯を歌によって表わしたと解される。

⑤に登場する「ますみの鏡（白銅鏡）」とは、表面が澄んでよく写る鏡のことであり、次に示す神話に登場する。

伊弉諾尊の曰はく、「吾、御寓すべき珍の子を生まむと欲ふ」とのたまひて、乃ち左の手を以て白銅鏡を持ちたまふときに、則ち化り出づる神有す。是を大日靈尊と謂す。右の手に白銅鏡を持ちたまふときに、則ち化り出づる神有す。是を月弓尊と謂す（中略）即ち大日靈尊及び月弓尊は、並に是、質性明麗し。故、天地に照らし臨ましむ。

（『日本書紀』神代上・第五段一書第一、原漢文）

すなわち、イザナギがこの鏡を左手と右手に取った際、それぞれ生まれたのがオヲヒルメ（大日靈尊）とツクユミ（月弓）であった。オヲヒルメとは、アマテラスがまた天上に昇る前、地上にいた頃の名である。「ますみの御鏡」から導かれる神話のオヲヒルメが、大嘗祭に関わる歌に収められたのは、祭神として地上に降り立ち神事の対象となるアマテラスの性質を特徴づけるものとして考えられる¹⁵⁾。

以上、⑨から⑪の歌では、内裏に設営された大嘗宮で天皇が対峙した祭神を、神話を用いながら表わしているといえる。また、歌に詠まれた場所と時間は、アマテラスを祭祀する伊勢内宮と大嘗宮の神事を再現した神代が示されていた。⑪の歌で天石窟戸開きに関わる大嘗祭の中核的な歌の描写は終了する。しかし、神祇歌にはまだ続きの歌が収められていた。

三、後醍醐天皇を祈り送る歌

『新千載集』神祇歌が大嘗祭を表わす歌群である点は、前項で論じたとおりである。歌の描写を神事にそくして解けば、大嘗宮で神と天皇とが深夜に対峙する場面を読みとれる。また歌群にみる祭神は、天石窟戸の神話以来、伊勢内宮に祀られるアマテラスであった¹⁶⁾。⑪以降には、都から伊勢へと向かう歌が収められている。大嘗祭を終えた後の描写として捉えられる。以下、続きの歌を示す。

都にのほりて月をみてよめる 荒木田氏忠

⑫ 我がたのむ神路の山を出づるより身をはなるべき月のかげかは（九九九）

神祇歌に 荒木田氏之

⑬ いく秋をおくりむかへて神路山月もあまてる光なるらん (九五〇)

嘉元百首歌たてまつりける時、祝 従二位為子

⑭ 神路山内外の宮の木綿蔓いく世をかけて君まもるらん (九五二)

貞和元年豊受太神宮遷宮奉行の時、神宝御装束など検知しておも

ひつづけ侍りける 小槻匡遠

⑮ 君が代に又めぐりあふ小車の錦ぞ神の手向なりける (九五二)

⑫は、都から伊勢を想う歌である。「月のかげ」が登場するため、時間帯は夜を示している。次の⑬も同じく「月」が登場するため夜を示すが、場所は「神路山」⇨伊勢に遷っている。次の⑭に詠まれた神宮の神事で用いられる「木綿蔓」^{ゆふかづら}は、明け方の雲を示すことから時間も推移が読みとれる。そして「君まもるらん」と、御代が未永く続き天皇を守護する内宮⇨アマテラスが詠まれている。

⑮の歌は、貞和元年（一三四五）四月、外宮遷宮の際の歌であり、神宝装束の文様である「小車錦」が詠まれている。何代も続く天皇の治世のなかで、二十一年に一度の伊勢神宮の遷宮に遭遇した「君が世」を称えている。この歌が詠まれた年の十月に、北朝の崇光天皇が即位する。この歌は、天皇の即位と遷宮による社殿の造替が同じ年に行われた、新しい天皇と神宮とを同時に称える歌でもある。よって、この歌を本歌集に撰集することにより、新宮の皇祖神と天皇家の再出発を重ね合わせる期待が表われていると思われる。

さて、以下に続く歌を示すが、これまでの場面から一転する。

題しらず 藤原朝村

⑯ 鈴鹿山いざ関こえておもふ事なりもならずも神に祈らん (九五三)

よみ人しらず

⑰ ふりはつる身をはやながら五十鈴河この瀬にかけて猶いのるかな (九五四)

神祇をよませたまうける 院御製

⑱ 鈴鹿河八十瀬の波の立るにも我が身のための世をばいのらず (九五五)

題しらず 神祇伯資茂

⑲ 神風や御裳濯河の玉かしはしづむみくづと成りやはてなん (九五六)

荒木田守藤

⑳ みなかみはふかき神路の山ぞとも御裳濯河の流れにぞしる (九五七)

従三位常昌

㉑ これやこのあまてる神の天地をまもるしるしの千木の片削ぎ (九五八)

百首歌たてまつりし時、祝言 大納言顕実母

㉒ さかへ行く御代のためしはいにしへにありきあらずも神ぞ知るらん (九五九)

題しらず 権僧正良瑜

㉓ おのづから神は知るらんいはた川いはねどふかくたのむ心を (九六〇)

歌に詠まれた場所は⑭で内宮が、⑮で外宮が詠まれていたが、続く⑯では伊勢の鈴鹿関を越えて神に祈りを捧げ

る歌が詠まれている。また⑰と⑱の歌でも、五十鈴川の瀬に「猶いのる」、鈴鹿川では崇光院による「我が身のための世をばいのらず」と、祈る姿が詠まれている。編集時点において詠者の崇光院は存命中であり、その祈りとは北朝皇統の存続を祈るものであった。いわば、⑯から⑱は祈りの歌群として捉えられる。

注目すべきは、右歌の⑰「五十鈴川」から⑱「鈴鹿河」、⑲⑳「御裳濯川」、㉓「いはた川」と川の名が連続して登場する点である。この歌枕の国を地理的推移と捉えようと、五十鈴川（伊勢）↓鈴鹿川（伊勢）↓御裳濯川（神宮）↓岩田川（熊野）と、伊勢から熊野への移動がみられる。

これらの歌のうち、「御裳濯川」（内宮を流れる五十鈴川の異称）が流れる内宮域を詠んだ⑲の歌の意味について説明したい。この歌は川の流れとともに「玉かしはしづむみくづ（玉堅磐沈む水屑）」が詠まれている。「玉堅磐」とは水中にある堅い岩の美称であり、自らの心情をこの「玉堅磐」に重ねる歌が事例としてみられる¹⁷⁾。⑲の歌では、御裳濯川の底に沈む岩が「みくづ」であるという。この「みくづ」は「水屑」と「身屑」の意味が掛けられており、御裳濯川に沈む存在として表わされ、天皇の死を想起させる。この「玉堅磐」に喩えられたのは、のちに説明するが鎮魂対象としての後醍醐天皇の姿だと思われる。よって、後醍醐天皇救済の必要性を表わす歌として配列し、鎮魂へと導いているのではないか。

次の⑳の歌は、御裳濯川の「みなかみ（水上）」に関するものである。⑲の歌に引き続き御裳濯川が天皇と伊勢とのつながりを説明していく。㉑の詠者の荒木田守藤は内宮祠堂であり、荒木田氏の祖神はアメノミトオシ（天見通命）である。実は、この御裳濯川の川上は、アマテラス鎮座の起源が伝承されている場所である。すなわち、アマテラスが倭姫命に「是の神風の伊勢国は、常世の浪の重浪帰する国なり」と伝え、伊勢の御裳濯川の川上に祠が立てられたというものである。この時、アマテラスと共に巡行の送駅使であった五大夫の一人が、中臣連の遠祖大

鹿嶋であり、その孫が荒木田遠祖のアメノミトオシであった。(『日本書紀』卷第六、垂仁天皇二十五年三月十日条、『皇大神宮儀式帳』卷第一)。よって、倭姫命の伝承をもつ御裳濯の川上である五十鈴の流れに、荒木田氏が内宮禰宜祖神となるアメノミトホシの姿を認め、自ら詠じたといえる。歌の配列を踏まえれば、この歌は皇統を表わす川筋としても解される。

たとえば、御裳濯川の川上にアマテラス鎮座の姿を捉えた天皇の歌に、花園院詠の「水上のさだめし末は絶えもせず御裳濯川の一つながれに」(『風雅集』第二十・賀歌・二一九七)がある。天皇家が「末は絶えもせず」、それはアマテラス以来の「水上のさだめ」であるという。やはり「水上」を皇祖神に喩え、「御裳濯川」という「一つ流れ」に皇統が擬えられている。花園院によるこの歌は賀歌に入撰されているため、目的は皇統を言祝ぐ歌として解されるが、持明院統と大覚寺統が政治的対立関係にあったからこそ、花園院は神代に立ち戻り、皇統を川の流れに託し詠じたのではないか。

『新千載集』が編集された時期の天皇家は、家の分立により天皇家としての血統は一つではなく、先に触れたように政治上でも持明院統と大覚寺統、南朝と北朝に分立していた。鎌倉時代後半以降の皇統は、すでに血統と皇位継承とが一致しない状態が常であった。本歌集編集の時期は、後光厳天皇の父光厳院や兄の崇光院、叔父の光明院の三上皇と直仁親王が南朝に拉致されるなど、南朝側と激しく対立していた。よって②の歌も、天皇家の皇祖神と内宮禰宜の祖神とが、神路山にある「御裳濯川」の「水上」から流れる川筋に自らの皇統の正統性を託した歌と理解できる。

そして③では、外宮祠官の度會常昌が、天地を守るアマテラスの象徴として神殿の内削ぎの千木を詠んでいる。皇統の正統性が神話のアマテラスではなく、伊勢のアマテラスに結びつけられている。神話は天皇の正統性を表わ

すが、二つに分裂した皇統の正統性を差異化することは、神話の分裂につながるため不可能である。そのため、伊勢を舞台とする新たな神道説が、歌群の配列に影響したと考えられる。

②と③の「神は知るらん」の表現は、『古今和歌集』以来、祝言としての意味をもち、神に結果や行く末を託す歌群として捉えられる。②では「さかへ行く御代のためし(栄へ行く御代の例)」が神代に起源するのかしないのか、③では「いはた川(岩田川)」「(熊野)」において、「いはねどふかくたのむころ(言はねど深く恃む心)」について説明されている。本論で最後となる③の歌は、場所が熊野へと移る。これは何を意味するのか。

岩田川とは、熊野詣のための水垢離場であり、この川を渡ることが禊を意味していた。熊野が死者の国である点については、『日本書紀』神代上・第五段一書第五(原漢文)に、

伊弉冉尊、火神を生む時に、灼かれて神退去りましぬ。故、紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる。土俗、此の神の魂を祭るには、花の時には亦花を以て祭る。又鼓吹幡旗を用て、歌ひ舞ひて祭る。

と記され、イザナギが葬られた場所であった。熊野市有馬町にある「花の窟」は、イザナギの御陵として信仰されている。死の国として認識されていた熊野は、院政期以降に本宮・新宮・那智の三山が成立し、熊野本宮が阿弥陀の浄土に那智が、観音の浄土に擬せられたことにより熊野参詣が隆盛した場所である¹⁸⁾。

山本ひろ子氏は、熊野詣における道の作法とは「葬送の作法」であった点を指摘する¹⁹⁾。天台僧であった吉田流下部氏の慈遍が元弘三年(一一三三)に著わした『天地神祇審鎮要記』下には、中世における熊野信仰について、「現世ノ望ニ寄テ参詣ノ人結縁引接瀬しむ。故ニ道ノ作法、野送ノ儀式ナリ」と記されている²⁰⁾。さらに、イザナギがイザナ

ミの死をみて垢穢を祓除するために履を脱ぎ杖を留めたことが「今葬送^ル儀」と解釈され、イザナギが「浴水」した小戸川が三途の川であり「今此熊野ノ岩田川」であるという。いわば岩田川は三途川に擬された場所であった。この歌に登場する岩田川は、皇統に擬された御裳濯川で「水屑」のように「身屑」となった後醍醐天皇が渡る三途の川として詠まれ、配列されたのではないか。

詠者は、祖父に関白二条良実をもつ二条家出身の僧良瑜である。この次の歌については次稿の分析に続くが、良瑜の祖父である二条良実の詠となる。後醍醐天皇を良瑜の歌により鎮魂し、二条家の祖となる良実の歌から始まるのである。これは何を意味するのであろうか。

小括

本節では、『新千載集』神祇歌の配列にみる歌群の抽出と分析から、その編集の意図を考察した。神祇歌に編集された歌は、成立した時点の意味から、編者の意図を元とする配列に適した意味となり、新たな意味をもつ歌群として再編成される。歌を編集するという行為は、歌群や配列により歌集の目的を具現化する手段でもあったといえる。さて、神祇歌の冒頭歌から二十四首目の歌までを歌群として捉えるならば、次のとおりである。

1、大嘗祭を詠んだ歌(①から⑧)。うち①～⑤が大嘗祭の前段階、⑥から⑧が大嘗祭における神事を表わしている。
2、神事における祭神のアマテラスを詠んだ歌(⑨～⑪)。天石窟戸が開かれた後のアマテラスが照らした光の世界と、神代における時間の推移を読み取ることができる。

3、都の天皇を伊勢ノアマテラスが守る歌(⑫から⑮)。歌に詠まれている夜から明け方を表わす時間を経て、新

しい遷宮後の神宮神殿と新たに即位する天皇の登場とが重ね合わせられている。アマテラスが天石窟戸から伊勢神宮へと直線的に遷座しているため、おそらく伊勢神道の影響を受けていると思われる。この点については今後の課題とする。

4、神に祈る歌(⑬から⑱)。それまでの歌から一転して、鈴鹿山を越え再び伊勢に向かい、鈴鹿川や五十鈴川に向かい神に祈る姿が詠まれている。この歌群以降、後醍醐天皇に対する鎮魂が表わされている。

5、後醍醐天皇の浄土入りの歌(⑲から⑳)。内宮の御裳濯川の川筋が天皇家の系譜や血筋に見立てられ、川に沈む「玉堅磐」(⑲)を死した天皇に擬し、歴代天皇の盛衰は、天地を守る皇祖神のアマテラスが知る事柄であるとする。同じく神が知る事柄として、浄土へと続く熊野の岩田川を渡り、浄土へと入るであろう後醍醐天皇の姿(㉓)が詠まれている。

以上に示した本歌集の神祇歌には、後醍醐天皇に対する鎮魂が歌の配列や歌群に表わされている。しかしそれだけではなく、本節で取り上げた範囲の和歌においては、神話における天皇の起源を再確認するために、大嘗祭や天地開闢神話、天石窟戸神話に関わる歌を配列させていた。これらは天皇の代替わり、天地の始まり、天を照らす光の復活など、新たに始まる治世に期待をもたせるような歌群でもある。

さらに、皇統を伊勢の川筋に喩え「一」とする理念や、その盛衰を皇祖神のアマテラスに託している点は、再び皇統が分立しないよう念じるに近い表現といえる。そして、後醍醐天皇に対する鎮魂の態度は、熊野の浄土入りにより表わされていた。このように、伊勢のアマテラスと天皇家との関係を強化するような新たな神話表現が、歌の配列と歌群によって構成され、神話的次元においても分裂した皇統の回復が求められていたといえる。

註

- (1) 建武二年(一二三五)正月十三日に内裏で「竹有佳色」を講ぜられた際に「百敷や生ひそふ竹の敷ごとにかはらぬ千世の色ぞ見えける」(慶賀歌・二二八七)を詠じ、『新千載集』に収めた。
- (2) 深津陸夫「新千載和歌集の撰述意図」(『中世勅撰和歌史の構想』笠間書院、二〇〇五)
- (3) 深津陸夫「勅撰和歌集神祇部に關する覚え書き」(『皇學館大学神道研究所紀要』二〇、二〇〇四)
- (4) 深津陸夫、前掲註3論文、参照。
- (5) 京都市編『史料京都の歴史6 北区』平凡社、一九九三
- (6) 岡田精司「中臣寿詞攷」(『大嘗祭と新嘗』学生社、一九八九)
- (7) 深津陸夫、前掲註2論文、参照。
- (8) 「山州名勝志卷七葛野郡 紙屋川」(増補京都叢書刊行会編『京都叢書』第十九(増補京都叢書刊行会、一九三五)
- (9) 田中初男『踐祚大嘗祭 研究編』水耳社、一九七五
- (10) 「ことわりや天の岩戸もあけぬらん雲の庭の朝倉の声」(藤原俊成『長秋詠草』／『風雅集』冬・八八七)、「朝倉の声こそ空に聞こゆなれ天岩戸を今やあくらん」(藤原致時『金葉集』初度本・冬・四二八)と、ともに天窟石戸を開く神樂歌として「朝倉」を結びつけている。
- (11) 本文引用の『日本書紀』は、坂本太郎他編『日本古典文学大系67 日本書紀』(岩波書店、一九七六)の訓み下し文による。
- (12) 『古事記』上巻には国之常立神から始まる「神世七代」の神々が記されている。ただし、「葦牙」は「別天つ神五柱」の記述に「葦牙の如く萌え騰る物によりて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神、次に天之常立神。この二の神もまた、独神と成りまして、身を隠したまひき」と記されている。
- (13) 松本郁代『中世の即位儀礼と神仏』(吉川弘文館、二〇一七)で説明した。
- (14) 「糸竹」を詠んだ歌に、藤原実兼の「神風やみもすそ川のささ浪に声をあはする夜のいと竹」(『夫木和歌抄』・一八)がある。「み

もすそ川（御裳濯川）」とは神風を枕詞にする内宮を流れる五十鈴川の別称である。静かな内宮の夜に御裳濯川のさざなみの音と管弦の音とが合わさる音をつうじ、内宮の神域が「神代より今もたえせぬ」神代と連続する場所としての描写を読みとることができる。

(15) 大嘗宮は高天原を再現したとする説が有力であるが、この歌を大嘗祭に結びつけて解釈するならば、天上のアマテラスが地上ではオヲヒルメになり、大嘗宮に降りたった場面を想定できる。この点については別稿で考察したい。

(16) この点は、『日本書紀』神代巻の記述にそくせば飛躍がみられるが、伊勢を新たな神話に再構築するものとして考えられ、今後の課題とする。

(17) 源俊賴による「堀河院御時、百首歌たてまつりける時、はじめの恋の心をよめる」詠に「難波江の藻にうづもるる玉がしはあらはれてだに人を恋ひばや」(『千載集』恋一・六四一)がある。

(18) 豊島修『死の国・熊野』(講談社、一九九二)、宮家準『修験道と日本宗教』(春秋社、二〇〇五)

(19) 山本ひろ子「中世熊野詣の宗教世界」(『変成譜』春秋社、一九九三)

(20) 神道大系編纂会編『神道大系 論説編三 天台神道(上)』(神道大系編纂会、一九九〇)

(以上、松本郁代執筆)

附 『新千載和歌集』巻第十 神祇歌(九三八〜九六〇番歌) 註釈

凡例

一、『新千載和歌集』神祇歌(九三八〜九六〇番歌)について註釈を行った。

一、註釈においては『新編国歌大観』(底本・書陵部蔵吉田兼右本)を用い、適宜漢字をあてはめた。

一、註釈に当たっては次の項目を挙げた。

1、【作者】略伝を示した。

2、【通釈】和歌の現代語訳はできる限り作品の語順に沿うよう心がけた。

3、【語釈】説明を要すると思われる語句に解釈・解説を加えた。なお、必要に応じて詞書に記される語句にも解説を加えた。

4、【参考】本歌・本説および詠歌や解釈に当たって参考となる作品を挙げた。『万葉集』は新日本古典文学大系に拠り旧歌番号で示した。他の歌集については『新編国歌大観』に拠った。

5、【他出】出典及び他の歌集に見られる場合は書名を掲げ、異同が見られる場合は該当句を指摘し異同本文を示した。

6、【補説】各項目で書ききれなかった内容がある場合など、必要に応じて解説・考察を加えた。

亀山殿七百首歌に、平野を

後宇多院御製

九三八 今も猶民のかまどの煙までまもりぞすらむ我が国のため

【作者】後宇多院—文永四年（一二六七）生、元亨四年（一二三四）没。第九一代天皇。亀山天皇皇子。『続千載集』を下命。『新後撰集』初出。『菟玖波集』作者。

【通釈】仁徳天皇もうたわれた「竈の煙」を今もなお続くようにまもるのだろう、わが国のために。

【語釈】●亀山殿七百首歌—元亨三年（一二三三）七夕の夜、後宇多院の仙洞御所、亀山殿で催行。●平野—山城

国の歌枕。洛北、紙屋川を境として北野の西北方に広がり、衣笠山の東麓に至る一帯の野。中央に平氏・源氏など八姓氏の氏神とされる平野神社（現、京都市北区平野宮本町、主神は今木神）がある。大嘗祭の前に禊を行う場所。

●今も猶民のかまどのけぶり—本歌参照。平野社の祭神である久度神や古開神は竈神でもある。

【参考】本歌「たかき屋にのぼりてみれば煙たつたみのかまどはにぎはひにけり」(『新古今集』賀・七〇七・「みつぎものゆるされて、国富めるを御覧じて」・仁徳天皇)

【他出】『龜山殿七百首』(雑二百首・平野・六七四、第四句「まぼりぞすらん」)

建春門院おなじ社にまゐらせ給うけるに御ともの上達部のなかに

よみ侍りける

よみ人しらず

九三九 ちはやぶる平野の松もけふこそは花さく春のためしなるらめ

【作者】 読人しらず

【通釈】 平野神社の松も参詣した今日この日に花を咲かせる春の好例となることでしょう。

【語釈】 ●建春門院―平滋子。康治元年(一一四二)生、安元二年(一一七六)没。後白河天皇皇后。高倉天皇母。

●おなじ社―平野社。建春門院の平野社への御幸は承安二年(一一七二)四月二十七日が知られる。●ちはやぶる―神を導く枕詞。●平野―九三八番歌参照。●下句―松の花は百年の一度咲くとされ、祝意を示す。

【参考】「ちはやぶる平野の松の枝しげみ千世も八千代も色はかはらじ」(『拾遺集』賀・二六四・「初めて平野祭に男使たてし時、歌ふべき歌よませしに」・大中臣能宣)

人人に百首歌めされけるついでに、神祇を

後二条院御製

九四〇 ちはやぶる神のすごもに霜さえしその暁は今も忘れず

【作者】 後二条天皇―弘安八年(一一八五)生、徳治三年(一一三〇八)没。第九四代天皇。後宇多天皇皇子。『新後

撰集』初出。『菟玖波集』作者。

【通釈】 神膳に供進された食薦に霜が冴え輝いていた、その暁の美しい様子を今も忘れずに覚えている。

【語釈】 ●百首歌―年次不明。後二条天皇は多くの百首歌を詠んだとされる。●ちはやぶる―九三九番歌参照。●神のすごも―「すごも」は食薦。神膳の下に敷く竹を簀のように編んだもの。●その暁―大嘗祭の次第には亥の刻と寅の刻に夕御膳と朝御膳の二回の供進があるという(松前健「大嘗祭と記紀神話」(岡田精司編『大嘗祭と新嘗』学生社 一九七九年)参照)。ここでは大嘗祭の折に朝御膳の行われたことをさす。

【他出】『六華集』(神祇・一八七八・作者を「後京極」(良経)とする)

題しらず

順徳院御製

九四一 とりかざす日かげのかづらくり返し千世とぞうたふ神のみまへに

【作者】 順徳院―建久八年(一一九七)生、仁治三年(一二四二)没。第八四代天皇。後鳥羽天皇皇子。『続後撰集』初出。

【通釈】 取り挿頭す日陰の蔓を繰り返し千年も長く続くようにと謳います、神の御前で。

【語釈】 ●日陰の蔓―大嘗祭などの神事に、穢れを払うため冠むかの笄かぎに、古くはシダの一種である植物を左右に付けて垂らしたものの。その後白糸や青糸を組んで作った。●下句―我が世の長く続くことを神に誓い祝う。

【他出】『順徳院百首』(冬十五首・六九・定家評語に「日陰鬘千歳のこゑ句其興候」とある)。

後京極撰政家百首歌に

前中納言定家

九四二 神代より契有りてや山藍に摺れる衣の色となるらむ

【作者】藤原定家―応保二年（一一六二）生、仁治二年（一二四二）没。父、俊成。正二位権中納言。『千載集』初出。『菟玖波集』作者。

【通釈】神代の時から約束があつて、山藍は青摺りの衣の色となつてゐるのだろうか。

【語釈】●後京極撰政治家百首―他出参照。●山藍にする衣―「山藍」はトウダイグサ科の多年草で、樹液を染料となる。「山藍にする衣」は大嘗会や神事で着する小忌衣をこの染料で摺り染めた「青摺り」を用いたことによる表現。

【他出】『拾遺愚草』（上・建久二年冬左大将家「十題百首」・草十・七三二）

【補説】久保田淳『藤原定家全歌集』（ちくま学芸文庫）の注は「山藍の衣」を石清水八幡宮の臨時祭の折に着すとする。

冬神祇といへる事をよませ給うける

伏見院御製

九四三 天の戸のあけし昔をうつしきて神世にかへす朝倉の声

【作者】伏見院―文永二年（一二六五）生、文保元年（一二三一）没。第九二代天皇。後深草天皇皇子。新後撰集初出。菟玖波集作者。

【通釈】天の戸を開けた、その昔を移してきたようにあの神の代に返す朝倉の声よ。

【語釈】●天の戸を開けし―アマテラスが隠れていた天の戸を開けたという神話を踏まえた表現。●昔―神代の昔。●うつしきて―神の代を「写し」と「移し」を掛ける。●かへす―神代に戻る、の意。神楽歌の「朝倉」が転調する返し物であることから朝倉の縁語。●朝倉の声―神楽歌「朝倉」、「朝倉や 木の丸殿に 我が居れば 我が居れ

ば 名告りをしつづつ行くは誰」(一説・行くは誰が子ぞ)を歌う声。

【参考】「朝倉の声こそ空に聞こえゆなれ天岩戸を今やあくらん」(『金葉集』初度本・冬・四二八・藤原致時)、「こ
とはりや天の岩戸もあけぬらん雲るの庭の朝倉の声」(『文治六年女御入内和歌』二七二、『長秋詠草』六四六、『風
雅集』冬・八八七・「文治六年女御入内の屏風に、十二月内侍所御神楽の所」・藤原俊成)

【他出】『伏見院御集』(「冬神祇」・一五九〇)

文保百首歌たてまつりける時

法印定為

九四四 天地のひらけし時の蘆牙あしかびや神の七代のはじめなりけん

【作者】定為―生年未詳、嘉暦二年(一三二七)以前没。醍醐寺の僧。父・二条為氏、兄・為世。『続拾遺集』初出。

【通釈】天地開闢の時の葦牙は神の七代の第一神であったのだなあ。

【語釈】●天地のひらけし―『古事記』序文に「天地の開闢あめつちひらけしより始めて」と世界の始まりを記す。●「蘆牙」―葦牙。
葦の若い芽のこと。『古事記』には「葦牙の如く萌え騰がる物に困りて成りし神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神うましあしかびひこぢ」
と見え、葦の芽のように生き生きとした生命力を表す神(新日本古典文学全集『古事記』頭注)をいい、『日本書紀』
(神代上)には「状葦牙の如く、便ち神に化爲る。国常立尊と号す」とある。【補説】参照。●神の七代―『古事記』
に「上の件の国之常立神以下、伊耶那美神以前を并せて神世七代と称ふ」とある。「神の世」が「七代」という意。
●はじめなりけん―「葦牙」の語釈に記したように『日本書紀』では国常立尊を始原神とする。【補説】参照。
【参考】本歌「葦牙の神の萌しも遠からず天つ日繼の初めと思へば」(『日本紀竟宴和歌』上・四・「得国常立尊」・
藤原春海)

【他出】『文保百首』（雜・三〇九五）、『続現葉集』（神祇・七一八）、『六華集』（神祇・一八八一・「新千」・法印定好）
【補説】参考に示した『日本紀寛宴和歌』では歌に次いで「天地開くる初め、浮かび漂へる中に、一つの物あり、形葦牙の如くして、神となれり、これを国常立尊と申す、神の代の初めなり。「アシカビ」とは葦の角ぐめる形なるべし」とある。

百首歌めされける時

後醍醐院御製

九四五 天の戸のあけし月日もかはらぬは神世ながらの光なりけり

【作者】後醍醐院―正応元年（一二八八）生、延文四年（一三三九）没。第九六代（南朝初代）天皇。後宇多天皇皇子。

『続後拾遺集』を下命。『新後撰集』初出。『菟玖波集』作者。

【通釈】天の戸を開けて以来、月日も変わらないのは神代そのままの光なのだなあ。

【語釈】●天の戸のあけし―九四三番歌参照。●光―和光同塵を意味する。【参考】参照。

【参考】「神代より光をとめて朝熊の鏡の宮に澄める月影」（『続拾遺集』神祇・一四一三・「神祇歌の中に」・前大僧正隆弁）

神祇歌の中に

二品法親王慈道

九四六 天の原あけし岩戸の神路山日月くもらぬ世にこそ有りけれ

【作者】慈道―弘安五年（一二八二）生、暦応四（興国二）年（一三四一）没。龜山天皇第一七皇子、母は帥典侍、兵部卿平時仲女。正和三年（一三一四）天台座主。その後三度歴任。後醍醐天皇の護持僧や天王寺別当を務める。

『新後撰集』 初出。

【通釈】 高天原の天岩戸を明けて以来、続く神路の山よ、太陽も月も一点の曇りもない君が治世であることだ。

【語釈】 ●天の原―古代神話における天上の国、高天原。●開けし岩戸の―九四三番歌参照。●神路山―伊勢国の歌枕。現在の三重県伊勢市宇治にあり内宮の南西、五十鈴川中流域一帯、神宮の神域をめぐる御山の総称。宇治山・天照山・鷲日山・太山などの別称がある。●日月くもらぬ世―「日月」は太陽と月、それが一点の曇りもない天皇が治めている世。

【他出】 『慈道親王集』（神祇・一九〇・第五句「世にもすむかな」）

【参考】 「父母を見れば尊し：天へ行かば汝がまにまに 地ならば大君います この照らす 日月の下は 天雲の向伏す極み 谷蟻たぐの さ渡る極み 聞し食す 国のまほらぞ」（『万葉集』 卷五・八〇〇・「惑へる情を反さしむる歌一首」） 「天の原あけし岩戸のおもかげもあなおもしろのゆきのあしたや」（『為家五社百首』 ゆき・伊勢・四一四）

建武二年内裏千首歌に、冬雑物といふ題をたまはりてよみてたてまつりける

藤原盛徳

九四七 天の原岩戸をあけし神代より今もたえせぬ糸竹の声

【作者】 藤原盛徳―生没年未詳。弘長元年（一二六一）頃生か。元応四年（一三二九）以前に出家。父・盛継。五位、对馬守。二条為世の門弟。頼阿、元可、公順との交流がそれぞれの家集に見られる。『新後撰集』 初出。

【通釈】 高天原の天岩戸を開けた神代の昔から今も途絶えることのない、糸竹の雅びな音色よ。

【語釈】 ●上句―九四六番歌参照。●糸竹の声―和楽器の音。ここでは宮中で行われる雅楽の音色が今も絶えることなく続いていることをいう。

【参考】「雲の上に今も絶えせぬ乙女子が袖ふる事も遠き昔を」(『宝治百首』冬・二二七六・「豊明節会」・但馬)

題しらず

中臣祐親

九四八 くもらじなますみの鏡影そへて岩戸を出でし月の光は

【作者】中臣祐親—仁治元年(一二四〇)生、元亨二年(一二三二)没。父・神主祐賢また祐茂とも。春日若宮神官。『新後撰集』初出。

【通釈】曇ることのない真澄の鏡の光を添えて、天岩戸をお出ましになった月の光はさらに輝いている。

【語釈】●ますみの鏡—一点の曇りもなくよく澄んでいる鏡。『日本書紀』(神代上)に伊弉諾尊が白銅鏡ますかのかがみを右手に持ったときに生まれたのが月弓尊つゆみのみこととされる。●岩戸を出でし—九四三参照。●月の光—「月」は鏡を象徴。

【参考】「君が世を照らさん末のひかりにぞ岩戸を出でし月日なるらん」(『臨詠集』神祇・三一九・「神祇の歌とてよませ給うける」・達智門院)

「あきらけく岩戸を出でし朝より天てる神の国ぞさかゆる」(『等持院百首』雑・九九／『新続古今集』神祇・二〇八三)

都にのぼりて月をみてよめる

荒木田氏忠

九四九 我がたのも神路の山を出づるより身をはなるべき月のかげかは

【作者】荒木田氏忠—安貞二年(一二二八)生、文永十二年(一二七五)没。内宮禰宜。『新後撰集』初出。

【通釈】我が頼みとしている神路山を出発してから、この身を離れてしまうのであろうか、月の光は、いやそんな

ことはない。

【語釈】 ● 神路の山―九四六番歌参照。

【参考】 「わがたのむ日よしのかげはおく山のしばの戸までもささざらめやは」(『千載集』神祇・一二七五・「述懐歌の中によみ侍りける」・法印慈円)

【補説】 伊勢を離れ都にいても、我が身を離れることはない神のご加護を反語で表現。

神祇歌に

荒木田氏之

九五〇 いく秋をおくりむかへて神路山月もあまてる光なるらん

【作者】 荒木田氏之―生没年未詳。延慶三年(一三二〇)頃生存。父・神主氏忠。五位。『続千載集』初出。

【通釈】 何年もの秋を過ごしている神路山よ、月も大空にあって光り輝いているのだろう。

【語釈】 ● 神路山―九四六番歌参照。 ● あまてる―大空にあって照る。アマテラスを響かせるか。

【本歌】 「ひさかたの天照る月は神代にか出でかへるらむ年は経につつ」(『万葉集』巻第七・一〇八〇)

嘉元百首歌たてまつりける時、祝

従二位為子

九五一 神路山内外の宮の木綿蔓いく世をかけて君まもるらん

【作者】 従二位為子―生没年未詳。元亨二年(一三二二)生存。父・藤原為教。弟・為兼。京極派前期歌人。永福門院らの女房。『続古今集』初出。

【通釈】 神路山のある伊勢神宮の内宮外宮では、神事に用いられる木綿蔓を掛け、その長い木綿蔓のように何代も

の御代が末永く続き、天皇をお守りすることでしょう。

【語釈】●嘉元百首―現存の『嘉元百首』に当該歌は見えず、他出も見られない。●内外の宮―伊勢神宮の内宮と外宮。
●木綿蔓―木綿で作った蔓。「かけ」は「かづら」の縁語。

【参考】「神風やたまぐしのはをとりかはし内外の宮に君をこそいのれ」（『新古今集』神祇・一八八三・俊恵法師）、
「神風や内外の宮のみやばしらちたびや君が御代に立つべき」（『続拾遺集』神祇・一四〇九・弘長元年百首歌たてまつりける時、神祇・藤原家良）

貞和元年豊受太神宮遷宮奉行の時、神宝御装束など検知しておもひつづけ侍りける 小槻匡遠
九五二 君が代に又めぐりあふ小車の錦ぞ神の手向けなりける

【作者】小槻匡遠―生年未詳。貞治五年（一三六六）没。父・于宣。正四位下。『新千載集』初出。

【通釈】我が天皇の御代に再び巡り合う小車の錦は神への手向けなのであった。

【語釈】●貞和元年豊受太神宮遷宮奉行の時―貞和元年四月に北朝では伊勢豊受太神宮（外宮）遷宮の神寶用塗料を採銅所に熟銅金青等を進めさせた（壬生文書。なお、『師守記』六月二十三日条によれば北朝では遷宮奉行を中院通冬に命じている。）●まためぐりあふ―二十年に一度の式年遷宮をいう。●小車の錦―錦の織り文の名称。伊勢神宮の神宝がこの錦で包まれた。

【参考】「小車の錦手向くる神路山まためぐりあふ年もきにけり」（『続古今集』神祇・六九五・後嵯峨院）

題しらず

藤原朝村

九五三 鈴鹿山いざ関こえておもふ事なりもならずも神に祈らん

【作者】藤原朝村―本名、行朝。正応四年(一二九一)生、貞和四年(二三四八)没。父・基宗。従五位下、修理権大夫。
『風雅集』 初出。

【通釈】鈴鹿山よ、さあ、関を越えて心に思うことがうまくいこうがいくまいが神に祈ろう。

【語釈】●鈴鹿山―伊勢国の歌枕。伊賀越えの要衝として古くから関所が設けられていた。●なりもならずも―「なり」は「鈴」の縁。「も」は強調。参考歌参照。

【参考】「をふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずも寝てかたらはむ」(『古今集』東歌・一〇九九・「伊勢歌」)

よみ人しらず

九五四 ふりはつる身をはやながら五十鈴河この瀬にかけて猶いのるかな

【作者】読人しらず

【通釈】すっかり年老いてしまった我が身を昔と同じようにして、五十鈴川のこの瀬に(再び)関わりたいとさらに祈るばかりです。

【語釈】●ふりはつる―「ふり」に「経り」と「振り」を掛け、五十鈴川の鈴の縁語。●身をはやながら―我が身を以前の時のままの状態にして。「身を」に「水脈」を掛ける。「はや」は「早し」の語幹。参考歌の古今集歌では宇多天皇在位中のように、の意。ここは不明。●五十鈴川―伊勢国の歌枕。五十鈴川の尽きることのない流れや清く澄んだ水を皇室や神宮の栄えにたとえる。●この瀬にかけて―「瀬」には川瀬とその機会の意を掛ける。

【参考】「山河の音にのみ聞くもしきを身をはやながら見るよしもがな」(『古今集』雑下・一〇〇〇・「歌召しけ

る時に奉るとてよみて、おくに書きつけて奉りける」・伊勢)

神祇をよませたまうける

院御製

九五五 鈴鹿河八十瀬の波の立ゐにも我が身のための世をばいのらず

【作者】崇光院―建武元年（一三三四）生、応永五年（一三九八）没。北朝第三代天皇。光厳天皇第一皇子。持明院統の和歌伝統を守った。『新千載集』初出。

【通釈】鈴鹿川の多くの瀬の波が立つように、その騒がしい進退であつても私のためだけの世を、と祈ることはありません。

【語釈】●鈴鹿河―伊勢国の歌枕。鈴鹿山脈より鈴鹿市を流れ伊勢湾に注いでいる。八十瀬川。●八十瀬の波―多くの瀬の波と鈴鹿川の八十瀬を掛ける。●立ちゐ―波が「立」つと「立ち居（ここでは進退の意）」とを掛ける。

【参考】「鈴鹿河八十瀬白波わけすぎて神路の山のはるを見しかな」（『新勅撰集』神祇・五五五・「百首歌よみ侍りけるに」・藤原良経）、「鈴鹿川八十瀬の波はわけもせでわたらぬ袖のぬるる比かな」（『玉葉集』雑二・二〇七三・「延慶元年八月野宮よりいでたまふとて」・奨子内親王）

題しらず

神祇伯資茂

九五六 神風や御裳濯河の玉かしはしづむみくづと成りやはてなん

【作者】源資茂―文永十年（一二七三）生、嘉暦二年（一三二七）没。父・資緒王。正応元年（一二八八）源姓を賜り、臣籍降下。同年、神祇伯。従二位。勅撰集には『新千載集』のこの一首のみ入集。

【通釈】 神の御威徳よ、御裳濯川の石のように、我が身は沈んだ「水屑」のようになりはててしまふのでしようか。

【語釈】 ● 神風や―神の恵み、神の威徳。伊勢を導く枕詞としての用法もある。古代における歌語「神風」については山村孝一「歌語「神風」考」(『日本文学』四六一五、一九九七・五) 参照。● 御裳濯河―伊勢国の歌枕。五十鈴

川の別称。とくに逢坂峠に発し、内宮の南を西流して本流に注ぐ島路川をいうこともある。● 玉かしは―石のこと。

玉は美称。『和歌色葉』に「玉かしはといふに二の義あり。難波江の藻にうづもれる石をいふ。又、かしはの葉のもろにて玉に似たるをいふ也。又玉かしはとはほむる詞なり。常の事也」と見え、『八雲御抄』には「石 たまかしは」と見える。● しづむみくづ―「身くづ」に「水屑」を掛ける。「しづむ」「水屑」は川の縁語。

【参考】 「難波江の藻にうづもれる玉かしはあらはれてだに人を恋ひばや」(『千載集』恋一・六四一・源俊頼／『堀河百首』初恋)。「さのみやは身をうち河の玉がしは君の御代にも猶しづむべき」(『続千載集』雑中・一九二七・「嘉元百首歌奉りし時、河」・前大僧正道玄)

【補説】 参考歌に挙げた俊頼歌のように、沈んだ石が水面に現れるように、我が身も神の導きによって救われるだろうと詠む。

荒木田守藤

九五七 みなかみはふかき神路の山ぞとも御裳濯河の流れにぞしる

【作者】 荒木田守藤―生没年未詳。延文三年(一二五八)生存。父・行世。従四位、内宮禰宜。勅撰集には『新千載集』のこの一首のみ入集。

【通釈】 水上は深い神路山であると、御裳濯川の流れによって、私の血筋の源が、分かりました。

【語釈】 ●みなかみ―水流の本の方。上流。物事の源流を表す。天照大神を水源にたとえ、御裳濯川を導く序。●
神路山―九四六番歌参照。●御裳濯河―九五六番歌参照。

【参考】「みなかみのさだめしすゑは絶えもせず御裳濯河の一つ流れに」（『風雅集』賀・二一九七・「百首歌の中に」・
花園院）

従三位常昌

九五八 これやこのあまてる神の天地をまもるしるしの千木の片削ぎ

【作者】度会常昌―はじめ常良。弘長三年（一二六三）生、暦応二年（一三三九）没。父・貞尚。従三位。外宮一禰宜。
伊勢外宮歌壇、度会神道の中心人物。『玉葉集』初出。

【通釈】これこそあの天照大神が天地をお守りくださる証しの千木の片削ぎなのだなあ。

【語釈】 ●あまてる神―天照大神。平安後期から歌語として用いられるようになった、皇室の祖神。●千木の片削
ぎ―千木の歌語的表現。「千木」は神社の棟に交差して打ち、片方をそぎ落とした木。伊勢神宮ではそのそぎ落と
した面の平らな方が上に向いている「内削ぎ」という特徴がある。住吉を詠むことが多いが、ここでは【参考】に
挙げた後鳥羽院詠が意識された。家永香織氏「ちぎのかたそぎ考」（『転換期の和歌表現』青簡社）がある。

【参考】「久方のあまのつゆじもいくよ経ぬ御裳濯河の千木の片削ぎ」（『続後撰集』神祇・五四二・「神祇歌の中に」・
後鳥羽院）

百首歌たてまつりし時、祝言

大納言顕実母

九五九 さかへ行く御代のためしはいにしへにありきあらずも神ぞ知るらん

【作者】 源顕実母―生没年未詳。鎌倉時代から南北朝時代の歌人。父・藤原為道。大納言源雅長の家の女房となり権大納言源顕実母。『新千載集』初出。

【通釈】 このように栄えている御代が昔にあったかかったか、神だけがご存じのことでしょう。

【参考】 本歌「いにしへにありきあらずはしらねどもちとせのためし君にはじめむ」(『古今集』賀・三五三・「本康親王の七十の賀の、うしろの屏風によみてかきける」・素性法師)

題しらず

権僧正良瑜

九六〇 おのづから神は知るらんいはた川いはねどふかくたのむ心を

【作者】 良瑜―元徳二年(一三三〇)生、応永四年(一三九七)没。父・二条兼基。二条良基の叔父。大僧正に至る。園城寺長吏なども務める。『新千載集』初出。『菟玖波集』作者。

【通釈】 「岩田川」の「いは」という言葉ではないが、何も言わなければこの深い信心を、自ずと神はご存じなのでしょう。

【語釈】 ●神は知るらん―神様がご照覧くださいという祝意を表す言葉。「臥して思ひ起きて数ふるよろづよは神ぞ知るらむわが君のため」(『古今集』賀・三五四・「本康親王の七十の賀のうしろの屏風によみてかきける」・素性法師)、「春日野に若菜つみつつよるづ世をいはふ心は神ぞ知るらむ」(同・三五七・「藤原三善が六十賀によみける」・素性法師)。

●いはた川―岩田川は紀伊国の歌枕。富田川。現在の和歌山県西牟婁郡上富田あたりでの名称。「言はねど」を導く。

【参考】「いはた川わたる心のふかければ神もあはれとおもはざらめや」(『続拾遺集』神祇・一四五九・「熊野にま
るらせ給うける時、いはた河にてよませたまうける」・花山院)

(以上、鹿野しのぶ執筆)

